

第四章 創造について

第一節（一）「初めに、神は天地を創造された」

ここからウェストミンスター信仰告白第四章、「創造について」を学びます。第三章では「神の永遠の聖定」を学びました。神は永遠の昔から、御自身の御心のままに世界を導き、救いの計画を定めておられることを学びました。そして第四章では、その永遠の御計画が歴史の中で最初に現れた出来事、すなわち**創造**へと目を向けます。聖書は、「初めに、神は天地を創造された」という言葉で始まります。信仰とは、この最初の一節を受け入れることから始まると言っても過言ではありません。私たちは偶然に存在しているのではありません。この世界も偶然に生まれたのではありません。すべては神の御心によって存在するようになりました。この信仰が、私たちの人生の土台となります。

一 「創造」は教会の大切な信仰告白

私たちは日常でも「創造」という言葉を耳にします。「創造力がある人」「クリエイティブな仕事」、そのような意味で使われることが多いでしょう。しかし、教会が「創造」と言うとき、その意味は全く異なります。聖書における「創造」は、神だけに属する御業です。ヘブライ語聖書で「創造する」と訳される動詞「バーラー」は、その主語が神である場合に用いられます。人間は材料を加工したり、新しい組み合わせを考えたりすることはできます。しかし、存在そのものを生み出すことはできません。神だけが無から万物を造られる創造者です。ですから、「創造」は単なる芸術的な創作活動ではありません。神だけに帰せられる救済史の最初の御業です。

二 三位一体の神による創造

ウェストミンスター信仰告白は、創造を語るにあたって、まず「父・子・聖霊なる神」と告白します。これは非常に大切な点です。通常、創造は全知全能の父なる神の働きに帰されますが、信仰告白は慎重に、これを三位一体の神の御業として述べています。ヘブライ書は「神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました」と告げ、コロサイ書は「万物は御子によって、御子のために造られました」と宣言します。また創世記一章では、「神の霊が水の面を動いていた」と記されています。御子による創造は父の創造と別のものではなく、聖霊による創造も同じ一つの神の御業です。創造とは、父・子・聖霊がそれぞれに関与しながら成し遂げられた、三位一体の神の共同の御業なのです。

三 「言葉による創造」の意味

ここで私たちは、創世記一章を思い起こします。神は何度も、「光あれ」「大空あれ」と語られました。すると、その言葉のとおりになりました。神は力づくで世界を造られたのではありません。**御言葉によって創造されました。**ここに聖書信仰の大きな特徴があります。そして新約聖書は、この「言葉」がキリストであると証しします。ヨハネは「初めに言があった」と福音書を書き始めます。創世記が「初めに神は」で始まり、ヨハネが「初めに言があった」で始まるのは偶然ではありません。創造の初めからおられた御子が、やがて肉となって私たちの間に宿られました。創造の言葉が、救いの言葉となって私たちのもとへ来られたのです。ですから、創造と救いは別々の出来事ではありません。同じ神が、同じ御子によって、世界を創造し、世界を新しくしてくださるのです。

信仰告白本文は「言葉による創造」を明示してはいませんが、参照聖句にヨハネ福音書一章二―三節が挙げられていることは重要です。「言」は初めから神と共にあり、万物は言によって成りました。この教えによって、創造と救いは深く結び合わされます。初めに存在と生命を与えた神の言葉は、今もキリストを通し、聖霊の働きと聖書の御言葉を通して、私たちの内に新しい命を創造します。福音を聞いて信仰へと起こされることは、創造者なる神の力が今日も働いているしるしです。

四 「無からの創造」が教えるもの

創造について語るとき、「無からの創造 (Creatio ex nihilo)」という言葉に耳をします。この言葉を聞くと、多くの人は「神は何もないところから世界を造られた」という点だけに心を向けます。もちろん、それは間違いではありません。しかし、教会が「無からの創造」と告白するとき、その意味はそれだけではありません。それは、**神だけが永遠であり、それ以外のすべては神によって存在を与えられた**という告白です。私たちは創造以前を知ることにはできません。時間も、空間も、物質も、生命も、すべて神の創造によって始まりました。ですから、「創造以前には何があったのですか」と問うことは、ある意味で人間の理解を超えた問いです。創造信仰は、人間の知識の限界を教えるとともに、創造者と被造物との決定的な違いを教えています。神は存在そのものの源であり、私たちは神から存在を与えられた者です。この区別を忘れないことが、信仰の出発点になります。

また、信仰告白が「見えるものであれ見えないものであれ」と述べる時、創造の範囲は物質的な世界だけに限られません。天使を含む霊的な存在も、私たちの思考や能力も、神に由来しない独立した領域ではありません。すべては被造物であり、神と等しくも、神を超えるものでもありません。「無からの創造」が強調するのは、無とは何かという思弁よりも、創造者と被造物の間の断絶です。神だけがすべての源であり、私たちは神から存在を受け、神に

依存して生きる者です。この区別は人間の傲慢を戒めると同時に、私たちが神の御手の中に確かに置かれているという平安を与えます。

五 神は善い世界を創造された

創世記第一章を読むと、神は創造の各段階で、「神はこれを見て、良しとされた」と言われます。そして最後には、「見よ、それは極めて良かった」と宣言されます。ここに聖書の創造信仰の中心があります。神がお造りになった世界は、最初から悪によって満たされていたわけではありません。神は善い世界を創造されました。それは自然だけではありません。人間もまた、神の祝福の中に創造されました。創造とは、神が命を与え、祝福を与え、存在を喜ばれた御業です。ここに悪意はありません。創造は、神の惜しみない贈り物なのです。

六 では、悪はどこから来たのでしょうか

ここで多くの人が疑問を抱きます。「神がすべてを創造されたなら、悪も神が造られたのではないか。」この問いは昔から繰り返されてきました。しかし聖書は、そのようには教えません。神の創造は、初めから終わりまで善い創造です。悪は神の創造の中に含まれていたものではありません。罪は、人間が神に背いたことによって世界に入りました。神が与えられた祝福を壊したのは、神ではなく人間です。もちろん、この問題については第五章「摂理」や第六章「墮落」でさらに詳しく学ぶことになります。しかし第一節では、まずはっきりと、**神の創造は善である**ということを確認しておきます。

七 創造の目的は神の栄光

では、神はなぜ世界を創造されたのでしょうか。この問いに対して、聖書は神の内面的な動機を詳しく説明してはいません。私たちが知ることのできるのは、神が善い世界を造られたこと、そしてその創造を通して神の栄光が現されるということです。詩編十九編には、「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す」とあります。被造世界は、自分自身を指し示すために存在しているわけではありません。創造者を証しするために存在しています。太陽も、星空も、山も、海も、人間の命も、すべて神を指し示しています。創造信仰とは、世界を神の栄光の光の中で見ることです。

信仰告白は、その栄光を「御自身の永遠の力と知恵と慈しみの栄光」と具体的に言い表します。ローマ書一章二十節が教えるように、被造物には目に見えない神の永遠の力と神性が現れています。エレミヤ書は、神が御力をもって大地を造り、知恵をもって世界を固く据えられたと語り、詩編は、地が主の慈しみに満ちていると歌います。したがって、自然の美しさや生命の秩序に心を動かされるとき、私たちはそれを自然そのものへの礼拝で終わらせず、

その源である神をほめたたえるよう招かれています。罪に捕らわれた人間は、被造物に現れた栄光を創造者に帰する代わりに、被造物そのものを神としてしまいます。創造信仰は、世界を軽んじることも、世界を神格化することも退け、世界を神の賜物として感謝して受け取る道を示します。

この告白は、自然を観察し研究する営みと対立するものではありません。聖書は、被造世界の仕組みを科学的に説明する教科書として書かれたのではなく、その世界が誰の御業であり、何のために存在するのかを告げています。自然科学は、与えられた世界の秩序や過程を丁寧に探究します。創造信仰は、その秩序も、探究する理性も、創造者からの賜物であると受け止めます。したがって信仰者は、分からないことを神の名で埋めるのではなく、分からないことを謙虚に学び続けることができます。同時に、科学が説明できる範囲だけを現実のすべてとする必要ありません。世界の仕組みを知ることと、世界の意味を知ることとは同じではないからです。創造の教理は、知的探究を恐れず、その成果を神への感謝と隣人への奉仕に用いるよう私たちを励まします。

創造信仰は、日々の生活の見方も変えます。食卓の糧、季節の移り変わり、働く力、休む時間、家族や隣人との交わりは、当然に存在するものではありません。一つ一つが、創造者から託された賜物です。神が世界を「極めて良いもの」に造ることをよしとされたなら、私たちは被造物を粗末に扱うことも、自分の身体や生活を無意味なものとして扱うこともできません。祈りの中で一日の恵みを数え、食事の前に感謝し、仕事を誠実にやり、休息を受け入れることは、創造者を告白する具体的な礼拝となります。信仰は特別な宗教的時間の中だけに閉じ込められるのではなく、造られた世界を神から受け取り直す生活へと広がっていくのです。

八 創造信仰が与える慰め

もっとも、傷ついた世界を前にして「すべては善い」と軽々しく言うことはできません。病気や災害、戦争や不正のただ中で、創造の善さは見えにくくなります。創造信仰は苦しみを否定したり、被害を小さく見せたりする教えではありません。むしろ、今見えている悲惨が世界の本来の姿でも、最後の姿でもない告白する力です。神が造られたものを神御自身が顧みておられるからこそ、私たちは嘆き、助けを求め、傷ついた命を支え、壊れた関係や環境の回復に仕えることができます。救いは被造世界を捨て去ることではなく、創造者が御自身の御業を新しくしてくださることです。その希望があるので、教会は現実の痛みにも目を閉ざさず、祈りと奉仕をもってそこに立つことができます。

最後に、この教理が私たちにどのような慰めを与えるのかを考えましょう。私たちは時として、世界を見て失望します。戦争があります。災害があります。病があります。死があります。そして自分自身の弱さにも苦しみます。しかし、それでも私たちは告白します。**この世界は神のものです**。私たち自身も、神のものです。罪によって世界は深く傷つきました。しかし、創造者なる神は、御自身がお造りになった世界を見捨てられません。そのために御子イエス・キリストを遣わされました。創造者が、救い主としてこの世界に来てくださったのです。だから私たちは、絶望する必要はありません。創造者である神は、救い主でもあります。創造を始められた神は、終わりの日に新しい天と新しい地を完成してください。

この希望が、創造信仰の慰めです。

第一節の結び

第四章第一節は、神が万物を創造されたという事実を語るだけではありません。それは、**私たちは誰のものであるのか**という問いへの答えでもあります。私たちは偶然に生まれた存在ではありません。私たちは神によって造られ、神によって生かされ、神の栄光を現すために存在しています。そして、その創造者なる神は、罪によって傷ついた世界をそのまま放置される方ではありません。御子イエス・キリストによって救いを成し遂げ、最後には万物を新しくしてください。ですから創造の教理は、過去の出来事を学ぶ教理ではありません。今を生きる私たちの存在の意味を教え、未来への希望を与える福音でもあるのです。

第二節（一）「神のかたちに創造された人間」

今回は、父・子・聖霊なる三位一体の神が、御心と御業によって天地万物を創造されたことを学びました。今回は第四章第二節に入り、人間の創造について学びます。創世記では、神は光を造り、大空を造り、海と陸を分け、植物や動物を造られた後、最後に人間を創造されました。ウェストミンスター信仰告白も、「神は、他のすべての被造物を造られた後に、人間を……創造された」と告白しています。この「後に」という言葉は、単に時間的な順序を示すだけでなく、人間の創造が天地創造全体の完成であり、頂点であることを示しています。

一 創造の完成としての人間

神は、人間が住む場所を先に整えられました。光が与えられ、昼と夜が分けられ、海と陸が備えられ、植物が生い茂り、動物が生きる世界が造られました。そして、すべてが整えられた後、人間が創造されました。これは、神が人間を特別に愛し、大切な使命を与えようとしておられたことを示しています。ただし、創世記に記された創造の順序を機械的に理解すべきではありません。創世記第一章では、第六日に陸の生き物と人間が造られます。一方、第

二章では、アダムが造られ、その後に動物たちが彼の前に連れて来られます。聖書は年代記を書くことを目的としているのではなく、創造の意味を語っているのです。信仰告白が「他のすべての被造物を造られた後」と述べるのも、人間の創造が**創造全体の完成であり、人間が被造世界を治める務めへ遣わされた存在**であることを示すためです。

二 「男と女に創造された」

信仰告白は、人間が「男と女に」創造されたと告白します。創世記第一章二十七節にも、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」とあります。ここで大切なのは、人間が初めから孤立した個人としてではなく、他者との交わりに生きる存在として造られたことです。創世記第二章は、この交わりの必要をさらに具体的に描きます。父・子・聖霊なる神が永遠の交わりのうちにおられるように、人間もまた、神との交わりと隣人との交わりの中で生きるよう召されました。したがって、男性も女性も等しく神のかたちを担い、その尊厳には優劣がありません。人間の価値は、性別や能力、社会的立場によって決まるのではなく、創造者なる神が御自身のかたちに造られたことに根拠があります。

三 人間とは何者なのか

信仰告白は、人間について、「理性的で不死の靈魂を持ち」と語っています。この表現は、肉体を悪とし、靈魂だけを善とみなす霊肉二元論を教えるものではありません。旧約聖書で「魂」と訳されることのある「ネフェシュ」は、しばしば人間全体、生きる人格そのものを指します。人間は肉体だけでも、精神だけでもなく、神によって造られた一つの人格です。同時に、聖書は人間が単なる物質ではないことも教えています。主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられました。人はこうして生きる者となりました。人間に与えられた理性と霊的な生命は、神を知り、愛し、祈り、礼拝し、死を越えて神との交わりにあずかるための賜物です。「不死」は、人間が神から独立して所有する性質ではなく、命の与え主である神に支えられて生きる性質として理解されます。

この理解は、身体をどのように受け止めるかにも関わります。身体は靈魂を閉じ込める殻でも、救いの妨げでもありません。神が土の塵から形づくり、命の息を吹き入れられた身体は、神に仕え、隣人を愛するために与えられたものです。私たちは身体を通して働き、語り、聞き、食べ、休み、涙を流し、互いを支えます。病や老いによって身体の力が衰えるときにも、人の尊厳が失われることはありません。復活の希望が示すのも、神が人間を身体から切り離された霊だけとして救われるのではなく、人格の全体を贖ってくださるということです。し

たがって、自分の身体をいたわること、他者の身体を傷つけないこと、弱い立場にある人の命を守ることは、創造の教理から生まれる大切な応答です。

四 人間の尊厳は創造に由来する

今日、社会では「人間の価値とは何か」が絶えず問われています。能力によって人を評価する考え方があります。経済的な生産性によって価値を測ろうとする考え方もあります。しかし聖書は、そのようには語りません。人間が尊いのは、成功したからでも、優秀だからでも、健康だからでもありません。神が御自身のかたちに創造されたからです。幼子も、高齢者も、病の中にある人も、障がいを負っている人も、すべての人が神の似姿として尊ばれるべき存在です。この教えは、キリスト教倫理の土台であり、教会がすべての命を尊ぶ理由でもあります。

五 「知識・義・聖」において創造された

ウェストミンスター信仰告白は、人間が神のかたちに創造されたことを、さらに具体的に説明しています。人間は、**知識と義と聖において、神の似姿として造られた**と告白します。これはエフェソ書四章二十四節とコロサイ書三章十節に基づく理解です。ここでいう「知識」とは、単に物知りであるという意味ではありません。神を知り、神との交わりの中で生きる知識です。また「義」とは、神との正しい関係に生きることです。そして「聖」とは、神に属する者として生きることです。つまり、神のかたちとは、人間の能力や知性だけを意味するものではありません。**神との関係そのもの**を意味しています。だからこそ、罪とは単なる規則違反ではありません。神との交わりが壊れることなのです。そして救いとは、その交わりがキリストによって回復されることです。

ここで参照されるコロサイ書三章十節とエフェソ書四章二十四節は、キリストにあって「新しい人」を身に着けることを語っています。このことは、神のかたちが単に創造の過去に属する教理ではないことを示します。人間は堕落によって、知識と義と聖における本来の姿を損ないました。しかし、神の御子キリストこそ完全な神のかたちであり、聖霊は私たちがキリストに似る者へと日々新たにしてくださいます。すべての人が被造物として神のかたちを帯びているゆえに尊厳を持ち、信じる者は救いの中でそのかたちの完成へと導かれます。創造と救いはここでも一つにつながっています。

六 律法は人間の心に刻まれていた

信仰告白はさらに、人間には「**神の律法をその心に記され、同時にそれを履行する力**」が与えられていたと教えています。シナイ山で十戒が与えられるよりも前、人間はすでに神の御

心に従って生きるよう創造されていました。律法は後から押しつけられた異物ではなく、人間の本来の生き方を示すものです。神を愛し、隣人を愛することは、人間性を損なう重荷ではなく、創造された人間が最も人間らしく生きる道でした。ローマ書二章は、律法を持たない異邦人にも、律法の要求する事柄が心に記され、良心がそれを証しすると語ります。墮落後の良心は曇り、誤ることもありますが、それでも人間が善悪、正義、真実を問わずにはいられないことは、創造者の御業の痕跡を示しています。

しかし、良心そのものを絶対的な基準とすることはできません。人は自分の欲望や習慣、社会の価値観によって、誤ったことを正しいと思い込むことがあるからです。心に記された律法の痕跡は残っていても、罪によってその読み取りは曇っています。そこで神は、聖書の御言葉を通して御心を明らかにし、聖霊によって私たちの良心を照らしてくださいます。信仰者の成長とは、自分の感覚だけを頼りにすることではなく、御言葉に聞き、教会の交わりの中で確かめ、悔い改めながら判断を整えられていくことです。良心は、責任を免れるための口実ではなく、神の前で自らを吟味する場です。神の赦しに支えられつつ、真実を愛し、隣人の益を求める判断へと導かれることが求められます。

七 自由を与えられた存在

神は人間を機械のように造られませんでした。人間には、考え、選び、神に応答する意志の自由が与えられていました。創造時の人間は、心に記された律法を履行する力を持ち、神に従うことができました。しかし、その意志は変わることをできないものではなく、信仰告白が述べるように、「違反する可能性」もありました。この自由は神から独立した絶対的な自由ではなく、創造者との関係の中で与えられた自由です。本当の自由とは、何でも好き勝手にすることではなく、神との交わりの中で喜んで御心に従うことです。罪は人を自由にするどころか、神から離れさせ、かえって束縛します。キリストによる救いは、失われた自由を回復し、再び神に仕える喜びへと私たちを導きます。

さらに神は、心に記された律法のほかに、善悪の知識の木から食べてはならないという具体的な命令を与えられました。この命令は気まぐれな禁止ではなく、人間が創造者を信頼し、自由な意志をもって服従を表すためのしるしでした。人間は、善悪の基準を自分で決めるのではなく、神から受け取る者として生きるよう造られたのです。この命令を守っている間、彼らは神との交わりの中であって幸福であり、被造世界を治めていました。創世記が描くエデンの園は、人間の幸福が財産や自律の拡大ではなく、神との正しい関係、互いの交わり、被造物への責任ある奉仕にあることを示しています。

八 被造世界を委ねられた人間

最後に信仰告白は、神が人間に**他の被造物を治める務め**を与えられたと語ります。創世記第一章にも、神が人間に海の魚、空の鳥、地のすべての生き物を治めるよう命じられたことが記されています。しかし、この「支配」は、好き勝手に利用する権利ではありません。神の代理人として、被造世界を管理する使命です。詩編二十四編は、「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは主のもの」と歌います。世界は人間の所有物ではありません。神のものであります。だから私たちは、自然を搾取するのではなく、守り育てる責任があります。近年、環境問題や気候変動が世界的な課題となっています。教会が環境保全について語るのは、流行だからではありません。創造信仰そのものが、被造世界を大切にする責任を私たちに託しているからです。神が「極めて良い」と宣言された世界を、私たちもまた愛し、大切に受け継いでいくことが求められています。

この務めは、自然環境だけでなく、人間のあらゆる働きにも及びます。土地を耕すこと、食物を備えること、家を建てること、学問を深めること、芸術を生み出すこと、技術を用いること、共同体の秩序を整えることは、いずれも被造世界を神の御心に従って管理する営みになり得ます。ただし、人間の知恵や技術が大きくなるほど、それを何のために用いるかが問われます。便利さや利益だけを追い求めれば、弱い人や将来の世代に負担を押しつけることがあります。創造者の代理人として治めるとは、神の慈しみを映し、命が共に生きられるよう配慮することです。私たちは世界の所有者ではなく管理を委ねられた者であり、いつかその用い方について神に答える責任を負っています。

さらに、人間に与えられた「支配」は、神の支配の性質を映すものでなければなりません。聖書の神は、被造物を暴力的に扱って御自分の力を示す方ではなく、命を与え、保ち、養う方です。したがって、人間が神のかたちとして治めるとき、その仕方にも慈しみと正義が求められます。家庭、教会、職場、地域社会で責任を持つ人は、権限を自分の優越のために用いるのではなく、委ねられた人々と働きを生かすために用いるべきです。創造の教理は、力を持つ者に特権を与えるのではなく、より重い奉仕の責任を課します。小さな責任を忠実に果たすことも、創造者の御業に応答する尊い召命です。

第二節の結び

創造された人間の第一の務めは、創造者を知り、喜び、礼拝することです。人間の理性、自由、良心、働き、他者との交わりは、どれも神から離れて自己完成するために与えられたものではありません。神の栄光を映し、神と隣人に仕えるために与えられました。けれども私たちは、しばしば賜物を自分の所有物のように扱い、与え主を忘れます。そのため、創造の教理を学ぶことは、知識を増やすだけでなく、「私は自分で自分を造ったのではない」と認める

悔い改めになります。同時に、「私は神によって造られ、知られ、目的を与えられている」と受け取る慰めにもなります。礼拝は、創造者の前で被造物としての正しい場所に帰る営みです。そこで私たちは、高慢から解放され、自己否定からも解放され、感謝をもって自分の召命へ送り出されます。

第四章第二節は、「人間とは何者か」という問いに対する聖書の答えを示しています。私たちは偶然に生まれた存在ではありません。神のかたちとして創造され、神との交わりに生きる者として召されました。神を知り、神を愛し、隣人を愛し、被造世界を託される。これが本来の人間の姿です。しかし、この美しい創造は次の章で大きな転機を迎えます。人間は神に背き、神との交わりを失います。その悲劇を理解するためにも、まず私たちは、「神が人間をどれほど尊く、良いものとして創造されたのか」を心に刻んでおかなければなりません。だからこそ、福音は単なる「罪の赦し」ではなく、**神が創造の目的を回復してくださる知らせ**なのです。